中国における住まい・インテリア教育[1)]の可能性に関する研究†

陣内　雄次*・朴　美玉**・上田由美子***
宇都宮大学教育学部*
宇都宮大学工学部**
とちぎの子どもとまちを考える会***

概要

スケルトン供給の住まいが一般的な中国では、入居者自身が住まい・インテリアに関する知識を持つことが重要となる。本稿では、中国において小学生時の学校教育に住まい・インテリア教育を取り入れる可能性について、中国の教科書分析、大学生へのアンケート調査、実際の研究授業を通して検証した。その結果、特に研究授業を通じ、児童たちに積極的な取組み姿勢がみられたこと、また事前事後アンケートから、住まいやインテリアに興味・関心を持つ児童が大幅に増えた結果が得られるなどの学習効果が見られた。

キーワード:インテリア、住教育、住まい・インテリア教育、研究授業、模型づくり

１．はじめに

(1)背景と目的

中国では急速な経済成長とともにこの数十年間、都市部を中心に中高層の集合住宅が数多く建設されている。これに伴い住民の生活レベルが向上し、住まいやインテリアへの要望が高まってきている。中国の住宅は一般的に部屋の仕切り、設備、壁面や床面などの仕上げを入居者自身が行なう「スケルトン供給」[i]であることから、住民が住まい全般の基礎知識を持つことが重要である。

一方、中国の子どもたちは、生まれてからすぐに個室を与えられ、小学校で学び始める前後から自分の部屋で寝るようになるのが一般的であるという。つまり、中国の多くの子どもたちは小学生になったら、自分の部屋を自由に使うことができるようになるのである。拙稿[ii]では、「子どもたちは自分の個室があることによって、自分の空間を工夫し、このことがインテリアや住まいに関心を持つきっかけとなっている」ことが明らかとなった。しかしながら、中国では学校教育（小・中・高校）で住教育が行われていないこともあり、一般の市民は住まいやインテリアに関する知識が必ずしも十分持ちえていないのが現状である。

こうした事から本研究では、中国の子どもたちが小学校の時から住まいやインテリアに興味・関心を持ち、自立して生活する力を身につけられるような、住まい・インテリア教育を実現していくことに資することを目的とした。

(2)研究手法

本研究の枠組みは以下の通りである。

①日本での調査など
- 学校での住教育の体系と教科書の分析
- 教員を対象とする学校現場での住まい・インテリア教育についてのアンケート調査
- 地域と連携した住教育事例調査
- 地域の専門家への聞取り調査

②中国の調査など
- 住教育関連教科書の分析
- 大学生を対象とする住まい・インテリア教育についての意識調査
- 小学校での研究授業の実施と児童への事前事後アンケート調査

２．日本における住まい・インテリア教育の可能性

本稿の研究フィールドである中国では、現在学校現場において、家庭科あるいは住教育という時間枠での授業は行なわれていない。そこで中国での調査に先立ち、同じアジア圏域であり住教育を体系的に

† Yuji JINNOUCHI*, Meiyu PIAO and Yumiko UEDA**: A Study on the possibility of Housing and Interior Education in China
* Faculty of Education, Utsunomiya University
** Faculty of Engineering, Utsunomiya University
*** NPO for Tochigi Children and their environment

行なっている日本での住教育を参考とすることにした。

(1) 日本の住教育

住教育の領域は幅広いが、領域的には大きく「人と住まい」「住まいの空間と構成」「住まいと社会」「住まいと環境」の４つに分けられている[iii]。日本の家庭科教育は、小学校5･6年生から始まり、中学校、高校へと続いている。この中で小学校は児童、生徒が数年間にわたり学ぶ家庭科の導入部という重要な時期であたる。

表１　住教育の領域と内容

領域	内 容
人と住まい	住まいの機能､住まいの構造･建て方、住まいの変遷、住生活の様式など
住まいの空間と構成	人、もの、空間の寸法、部屋、住まいの規模、住まいの構成、仕上げと色彩など
住まいと環境	住居の衛生、室内環境、住宅の性能、設備、環境と共生する住まい、住まいの維持管理など
住まいと社会	住宅水準、住宅事情、住宅の需要と供給、住宅政策、地域環境、まちづくりなど

出典：『住教育の推進方策と「住教育ガイドライン」の策定に関する検討調査』2008年　p. 129

2009年4月より一部先行実施されている新学習指導要領によれば、日本では小学校高学年から中学校までの義務教育の中で、住まいに関して多様かつ豊富な知識を習得するとともに、実践力をつけるよう工夫されていることが分かった。

家庭科の教科書の分析から、インテリアに関しては、小学校では身の回りの小物の整理整頓、掃除などが、また中学校では部屋の間取り図、住まいの工夫、小物づくりなどについて学ぶことを把握した。

日本における義務教育での住まいやインテリア教育は、児童・生徒の成長と合わせた内容となっており、中国での住まい・インテリア教育の方向性について示唆するところが多いことが分かった。

(2) 教員向けアンケート調査

では、実際の学校教育現場では、住教育はどのように行われているのだろうか。その内容を把握するために以下のような教員向けのアンケート調査を行った。

調査対象：栃木県内の小・中・高校の家庭科教員（教員免許更新講習受講者）15人

実施時期：2009年8月26日

表２　住教育を行っている授業時間数（一年間）

１．行っていない	３人
２．１時間	１人
３．２～３時間	４人
４．４～５時間	２人
５．６時間以上	３人

表３　住まいやインテリアに関する実践を授業に取り入れることについて

１．取り入れたい	６人
２．外部からのサポートがあれば	６人
３．知識がないので難しい	１人
４．取り入れなていない	０人
５．その他（他特別支援学校なので難しい）	１人

「家庭科で住教育を行なっている」と答えた教員は15人中10人､そのなかで6時間/年以上と答えた教員は3人、2～3時間と答えた教員が4人で、概して住教育に使う時間の割合が少ないことがわかった。授業時間数の多い教員は、その内容も幅広く充実していた。また、インテリア教育については、「自分の住環境をよくしていくということは、どう生きるかにつながる大切な学習」という肯定的な意見がある一方で、「子どもたちにとって興味が高まると思われるが、指導者の専門性に欠け、展開は難しい」という、理想と現実のギャップを指摘する声が少なくなかった。とはいえ、表2に示すように、そうした内容を「ぜひ取り入れたい」あるいは「外部からのサポートがあれば授業に組み入れたい」と答えた教員が多かった。

今回の調査は15人の教員を対象とした簡易な調査であったため、住教育の実態を系統的にみるところまでには至らなかったが、学校教育現場（小・中学校）で行われている住教育の時間割り、内容をおおづかみに把握することができ、今後中国で行おうとしている「住まい・インテリア教育」の研究授業の参考とすることができた。

(3) 地域での住教育（ワークショップからの分析）

住教育は学校に限らず、家庭、地域など多様な場面での展開が考えられる。現在、こうした地域による住教育は全国レベルで推進の機運が高まってきている。ここでは、地域と学校で連携し、家庭科や総合学習の時間を通して住教育の授業をサポートしている２つの実践事例を紹介する。

①藤沢市立新林小学校と神奈川県建築士会子どもの生活環境部会の取組み（朴が参加）

「昔の家に住むのなら～夏休みの民家たんけん」

目　　的:昔の農家の建物と生活を知ることにより、日本の住まいについて考える。
実施時期：2009年8月20日（木）
10：00～12：00
実施場所：藤沢市立新林小学校図工室および新林公園内の旧小池邸/長屋門
子ども参加人数：児童96名
ボランティア（子どものサポート）参加：9名

写真1　旧小池邸で説明を聞く子どもたち

ワークショップではまず、図工室にて紙芝居で世界の家を学習、次に、新林公園内の長屋門を見学、最後に図工室に戻り、感想や意見を発表する流れであった。1,2年生と3,4年生がそれぞれ二つのグループ、5,6年生が一つのグループとなった。

このワークショップでは、直接インテリアには触れなかったが、古民家での暑さをしのぐ工夫などにより、子どもたちが直接涼しさを体感できたり、素材に触ったりすることで、興味を喚起する様子が観察された。住教育においては、本や映像だけでなく、こうした五感を通した現地での体験学習が効果的であることが推察された。

②栃木市第五小学校における“まちづくり“を題材とする総合的な学習の時間の展開（陣内、上田が参加）

同小学校では、2004年度における6年生の総合学習のテーマを「まちづくり」とし、1年間（90時間）を通して授業が行なわれた。その間5回に渡って筆者らが、外部からサポートした。ここでは授業の終わりのほうで実施された「五小のまちジオラマ作成」について紹介する。

実施時期：2005年1月25日　10時～15時
実施場所：栃木市立第五小学校
子ども参加人数：児童105名
ボランティア（子どものサポート）参加：15名
内容:栃木第五小学校校区を約20のブロックに分け、1ブロックA1サイズのボードを作り、住宅地図をもとに幹線道路など主要な施設は予め記しておく。児童は4～5人づつのグループに分かれ1ブロック、1グループが担当し、それぞれ五小の街の未来をイメージして公園や建物などの模型をボードの上に作っていく。最後に20のブロックをつなげ全体を調整し完成。

写真2　五小のまちの模型づくりの様子

こどもたちにおいては、外部の専門家が入ることに対する期待はかなり大きかったようで、12歳というやや難しい年齢であるにも関わらず、これらの支援者に対して常に素直で真剣な態度で望んでいた。ジオラマ作成などにおいても専門家からのアドバイスに耳を傾け、やがては自分たちからわからない事をたずねる積極的な姿もみられるようになった。何より、自分たちが住んでいる身近な街の将来を自由にイメージし、工作という表現を通して作り上げていく過程は、子どもたちにとってワクワクする楽しい作業であった様子が感じられた。また、子どもたちだけでなく教員自身にとっても、専門家の指導とそれに対する子どもたちの反応には新鮮なものがあり、今後の授業方法について様々なヒントが得られたという。

これら地域での取り組み2例からわかったことは、「現場で、五感で感じることの大切さ」「自由にイメージし、（工作など）自分たちで作り上げていく楽しさ」「外部の人間がかかわることによる刺激」ということの重要性である。(2)で触れた現場の教員アンケート調査結果にあったように、外部の支援があれば、ぜひ取り組みたいという声にも呼応するものであり、中国での実践においても大いに参考になるものである。

(4)専門家が考える住まい・インテリア教育の可能性

これまで触れてきたように、充実した住まい・インテリア教育を行なうためには、専門家のかかわりが重要となる。ここでは、これら専門家らが、実際に住まい・インテリア教育を行うに当たって、子どもたちに何に気づいてほしいと考えているかなどについて把握するために、インタビュー調査を行った。

以下は、その結果の概要である。

表４　専門家へのインタビュー結果概要
実施期間：2008 年 11 月～12 月

インテリアデザイナー　０氏 ◆住まいへの興味・関心を持たせるには小学校の時からの教育が望ましい。 ◆子どもたちが自分から行動して学習することによって住まいやインテリアへの興味・関心を持たせることができる。
大阪芸術大学　非常勤講師 **インテリアプランナー　Ｓ氏** ◆住まい・インテリア教育はデザイナーや建築家を育てるのではなく、子どもたちに作品の出来不出来や美しさよりも、どれだけ相手（家族など）のことを考え、思って作ることができたかが重要。
神奈川県建築士会子どもの生活環境部会（会員５人） ◆単なる工作教室や見学会ではなく、子どもが何かを感じ、何かを考え、何かを得、自分の家族、居場所、好きなもの、気持ちいい空間などを想起させることが重要。

専門家らは、住まい・インテリアに関し、子どもの頃からの教育の可能性を示しつつ、その作品の美しさや出来栄えよりも、そこから子どもたちが住まい全般に興味関心を持ち、自分の好きなもの、自分にとって心地よい空間などを想起させること、また、家族など一緒に暮らしている人を思いやることへの気づきが重要であることを指摘していた。

３．中国の住まい、インテリアに関する教育実状

２章で述べた日本の状況と異なり、本研究の対象フィールドとなる中国では、住教育については、家庭や地域における日常の生活慣習のなかで、ごく自然に行なわれてきており、学校教育のなかで改めて「家庭科」という領域としては設けられていない。

こうしたなか、中国の小・中学校の現行カリキュラムを調査分析したところ、住まい・インテリア教育については「美術」と「総合実践活動」の時間での実践可能性が浮かび上がってきた。中国の小学校の美術教科書には、住まいやインテリアに関する内容が５、６年生向けとして豊富に用意されており、しかも内容は室内だけでなく、家の模型づくりや宅地周りの環境を考えるものまで幅広い。また、６年生では学んだ美術の知識で実際に自分の部屋を装飾する内容もみられた（図１，２）。

一方、総合実践活動の授業は教員が自由にカリキュラムを立案し実践することができるので、学校外での見学や体験的な学習も可能になる。

図１　小学校５年生「椅子ソファの制作」
出典：全国朝鮮文教材　義務教育朝鮮族学校教科書
美術５年生用　2008 年　pp. 18～19

図２　小学校６年生用「自分の部屋を装飾する」
出典：義務教育課程標準基礎練習
美術６年生用　2007 年　p. 29

こうしたことを考え合わせると、中国で住まい・インテリア教育を行う場合は、美術または、総合実践活動の枠での可能性が高いことが分かり、総合実践活動では住まいと関連づけた地域学習を行い、美術では５、６年生時のテキストの内容を活用し、住まいの内部空間や宅地周りの環境づくりなど、スキル的なことを学ぶという方向性が考えられる。

４．中国の大学生の住まい、インテリアに関する意識調査

本章では中国の大学生の住まい、インテリアに関する意識調査を行い、今後実施する「住まい・インテリア教育」の可能性を探った。

調査対象：中国上海華東政法大学学生　116 人
実施期間：2008 年 10 月 16 日～18 日
回収方法：学校の寮で配布、その場で回収
回収率：89%　　(116/130 人)
男女比率：男子学生 68 人(41. 4%)

女子学生 48 人(58.6%)

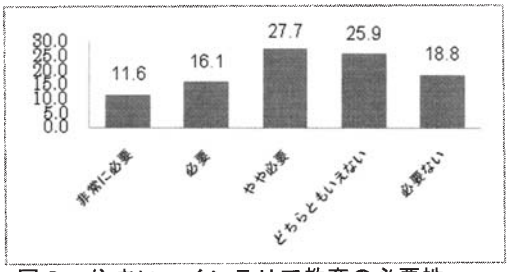

図３　住まい・インテリア教育の必要性
（n116　単位%）

「住まい・インテリア教育は必要なのか」という質問に対し、「非常に必要」が 11.6%、「必要」が 16.1%、「やや必要」が 27.7%と住まい・インテリア教育の必要性を感じている学生は合わせて 55.4%と半数以上であった（図 3）。

住教育で学びたい項目では「インテリア」が圧倒的に多く 67.2%だった。これに続いて「住空間の設計」が 39.7%、「室内環境」が 37.1%と、多くの若者がインテリアや室内空間に興味を持っていることがわかった（図４）。

また、将来自分の住まいを購入した際の内装については、「自分が主体で考えたい」が 40.4%と、「プロに任せる」の 33.7%を上回った。

このように若者の室内環境・インテリアへの関心が高いこと、将来自分の家のインテリアについても、自分自身が主体的に考えたいとする姿勢などから、

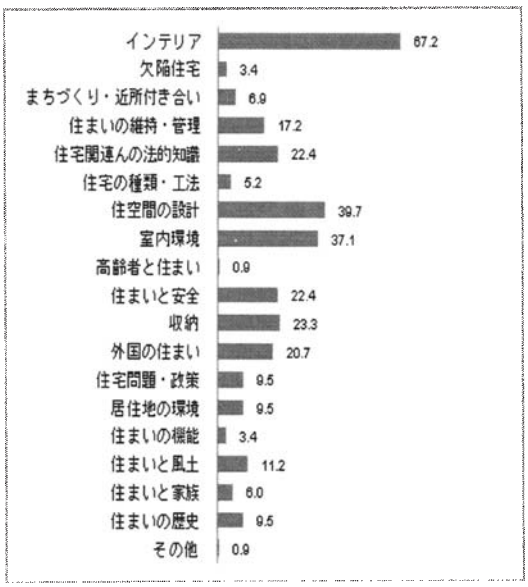

図４　住教育で学びたい項目
（複数選択　n116　単位%）

中国で「住まい・インテリア教育」を行う素地はある程度整っていると考えられる。従って、中国における住まい・インテリア教育の可能性は高く、住まい・インテリア教育の実践授業を行なう意義は十分あると考えられる。

５．中国での住まい・インテリア教育の研究授業

(1)研究授業の目的と概要

4 章までの結果をふまえ、中国の学校教育現場で実際に研究授業を行い、子どもたちの授業への反応や効果について検証するものとした。内容的には児童たちに自分の家族、居場所、空間などを考えさせ、よりよい住み方を工夫したり、住まいやインテリアに興味を持たせることを目的とした。現地協力校との調整の結果、総合実践活動の時間枠で行なった。

対象者：中国吉林省延吉市東山小学校
　　５年１班、２班　（合計 48 人、11 歳）
実施期間：2009 年５月６日（13：50－14：40）
　　５月７日（15：20－16：20）

具体的な学習内容：初日は児童たちに現在居住している住まいについて考えさせるために、現在の住まいについて気に入っているところとその理由をワークシート①に、不満なところとそれをどう工夫するかをワークシート②に、それぞれ記入してもらった。二日目は、「夢の部屋を作ろう」をテーマに、将来住みたい家をイメージして画用紙による室内の模型作りを行った。また、住まい・インテリア教育に関する事前事後のアンケート調査を行い、今回の研究授業の効果を探った。

(2)ワークシートからの分析

児童たちは現在居住している住まいのことについて、ワークシートに真剣に書いてくれた。主な結果は表 3 の通りである。

気に入っているところについては、「部屋を掃除している時」が 9 人と最も多く、その理由として「掃除をすると気持ちがよい」「親にほめられる」といったものが多かった。また、自分の部屋で変えたいところについては、「広さを変えたい」が 11 人で、そのほとんどの理由は「現在の居住空間が狭いから」であるが、これと同数の 11 人が、自分の好きなように「家の中の色を変えたい」、また 8 人が「カーテン、床、壁などを変えたい」と答えているのは、自身の部屋に自分らしさを表現したいという思いの現われと捉えられ、特筆すべき結果と考えられる。

表5　ワークシートの主な結果

家の中や生活の中で気に入っていること（ところ）ワークシート①	
部屋の掃除をしたとき（家事なども含む）	9人
家族と一緒に食事をしている時	7人
勉強をしている時（本を読む時も含む）	5人
PCで遊んでいる時	5人
リビングにいる時	4人
自分の家の中で変えたいこと（ところ）ワークシート②	
家の広さ	11人
家の中の色	11人
カーテン、床、壁など	8人
家具の配置	4人
照明器具	2人

児童たちは筆者らが思っていた以上に日頃から自分の住まいやインテリアについて意識し、関心を持っていることが伺える結果となった。

(3)模型づくり（室内空間）からの分析

初日のワークシート記入などで、児童たちに現在の住まいのことについて想起させたのに続き、二日目はそこから将来住みたい夢の家（自室）の模型を作ってもらった。模型は作品間で比較しやすいように、部屋や基本家具など（椅子、人）のサイズを揃えたキットを用意した（キットは、鈴木儀雄「子供のためのインテリア教育の可能性」から使用[iv]）。

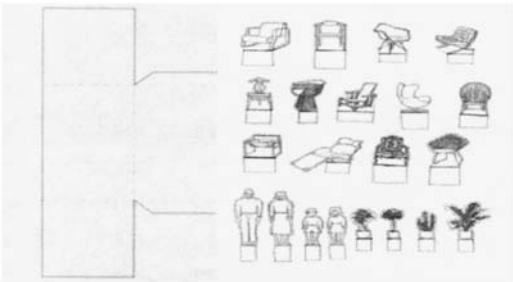

図5　使用したキット（1/50）

写真3　室内模型をつくっている児童たち

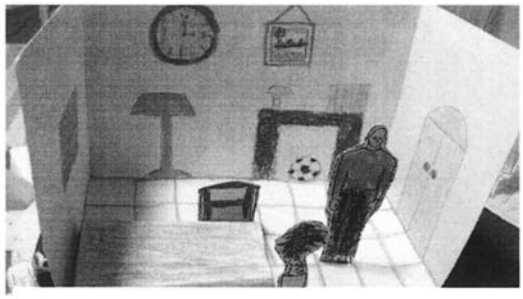

写真4　児童（男子）が作成した室内の模型
部屋にはベッド、机、椅子があり、スタンドライト、慣用植物もありインテリアに工夫がみられる。机の上には本が、下には趣味のサッカーボールがある。

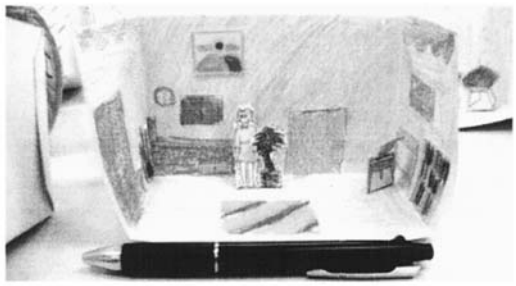

写真5　児童（女子）が作成した室内の模型
ベースはオレンジ色や黄色を多く使い、暖かい雰囲気がある。ベッド、机、窓二つ、ドアはもちろん、本棚、クルーゼット、カーペット、さらにベッドの下の収納まで考えられている。

男子児童はサッカーボールや野球の道具を描いたりして、インテリアよりも自らの趣味を主張する傾向が見られた。また、設備の自動ドアを描いたりしている例もみられた。女子児童は床や壁を色鮮やかにしたり、窓にカーテンを描いたり、家族の写真や小物を描いて可愛い雰囲気を出すなど、積極的にインテリア空間を考える姿勢が見られた。完成した模型の共通点として机と本棚と時計を約9割の生徒が描いており、帰宅してからも、家で勉強時間に追われている子どもたちの生活が垣間見えた。

(3)事前事後アンケートからの分析

今回の研究授業の効果をみるために事前・事後のアンケート調査を実施した。その結果、インテリアについて勉強したいかとの問いに対し、事前54.2%→事後82.9%と大幅に増えただけでなく、すべての質問項目（個々の室内要素への関心）について、事前に比べ事後は20～30%程度増加した（図6）。特に部屋をいろいろ変えたいと思うかという問いには、事前68.8%が事後97.6%と100%に近い割合となり、学習を通じて、住まいやインテリアについて大きな興味・関心を高めることができた。

この結果から、今後中国における「住まい・インテリア教育」を実践する場合、本研究授業で行ったような身近なインテリアの空間について考えることを導入とし、併せて具体的に模型などをつくることにより、児童たちの興味・関心を高めていくことができる可能性が示唆された。

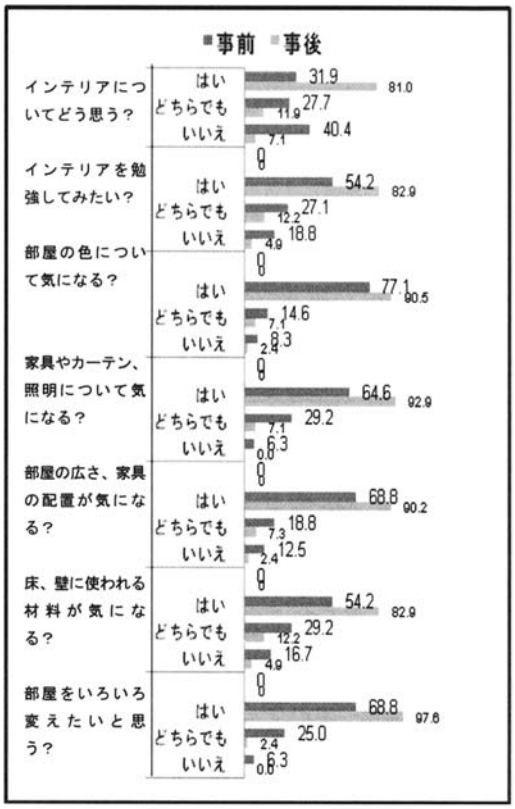

図６　事前・事後アンケート調査の結果
（事前ｎ４８人、事後ｎ４２人　単位％）

(4)カルテからの分析

児童一人一人について、記入してもらったワークシート①・②の内容、模型、事前・事後アンケート結果を入れ、番号順にカルテを作った。このカルテから、ワークシート①・②、室内の模型、事前・事後アンケートの関連性を探った。

図７　カルテのサンプル

ワークシートと模型との関連性を分析した結果、ワークシート②の「自分の家の中で変えたいところとその理由」を模型づくりに反映させた児童が少なからずみられた。そのいくつかの例について表６に整理した。内容的には、ワークシート②で「色を変えたい」と答えた児童の多くが、模型づくりで、温かい色にしたり、好みの薄い色や濃い色にするなどの工夫をしていた。また、二階建てを希望する児童は、部屋の中にそのことを示す階段を描いたり、現在の部屋が暗いと書いた児童は、２箇所に窓を描くなどの表現がみられた。ワークシート①・②で現在の住まいのことを考え、その上で室内空間の模型づくりをすることにより、児童たちがより住まいについて深く考えることができ、さらに、その考えを模型づくりで実現することにより、学習効果が高くなると考えられる。

表６　ワークシートと実際に作った模型との関連性

カルテ番号	ワークシートに記入された「変えたいところ」と、→以下は実際の模型に反映された部分	模型写真
11	古いベッドを替えたい。 →キットにはベッドの型紙がないが、児童がオリジナルベッドを作り、部屋を立体的に見せている。	
12	広くおしゃれにしたい。今は狭く、濃い色の部屋は暑く感じる。 →色鮮やかにし、緑と青を多く使い、部屋が涼しく感じるように工夫。	
24	日当たりがよくないので部屋が暗い →部屋を明るくし、さらに窓を二つにしている	
27	二階建ての家がほしい →部屋のなかに階段がつくられている	
31	部屋に緑の色しかなく、暗く、本があふれている →部屋は明るく、本や家具などが整理整頓されている。部屋全体がまとまった雰囲気	

5．おわりに

本研究では、一連の調査を経て、中国における住まい・インテリア教育の可能性と必要性を探った。

中国では現在家庭科の授業は行われていないが、小学校の美術教科書に、住まいやインテリアに関する内容が5,6年生向けとして豊富に用意されていることがわかった。中国の大学生の住まいやインテリアに関する意識調査からは、住まいやインテリア教育の必要性を感じている学生が半数以上みられるとともに、住教育で学びたい項目の中で一番人気が高かったのが「インテリア」（62.7%）であることが明らかになった。

一方、住まい・インテリア教育の研究授業を通じ、児童たちに模型づくりなどへの興味・関心がみとめられたこと、事前事後アンケートから、住まいやインテリアに興味・関心を持つ児童が大幅に増えた結果が得られたなど、本研究授業の学習効果が見られた。これらのことから、中国において住教育を行っていく場合、本研究授業で行ったような身近な住まい・インテリアの空間を学習題材として導入し、併せて具体的に模型をつくることなどにより、児童たちの興味・関心を高めていくことができる可能性が示唆された。

今後は、授業のなかで個室（自分の部屋）だけでなく、家族と一緒に過ごす部屋を題材としたり、部屋の改善点などについてのヒントを示す時間を設けたりするなどの工夫や、キットの内容についても再考しながら、授業内容を少しづつより充実したものにしていくことが求められる。そのためには、日本国内での事例でも述べたように、外部の専門家の支援が重要な鍵となることを忘れてはならない。

さらに、中国における住まい・インテリア教育は、総合実践活動と美術での学びを相互に連携させ、自分の部屋から住まいを考え、そして住まいから地域へ広げていくことも考えられる。住まいから地域を考える視点、地域から住まいを考える視点などを得ることにより、住まいと地域との関連性の中ではじめて自分の暮らしを自らデザインし、自己実現する力を育てることができるのである。

また、小学校だけでなく、中学校での住まい・インテリア教育へと発展させていく方向性を検討していくことが必要である。

参考文献

1) 「住まい・インテリア教育」とは人と人、人ともの・こと、人と空間、人と環境など多彩かつ複合的な関係性の中で、住まいやインテリアを核として自分がどう生きていくのかということを学び、自分の暮らしを自らデザインし、自己実現をしていく力を育てることである。

i 范悦　須田松次郎　中根博「中国都市住宅におけるスケルトン供給と入居者内装」『日本建築学会大会学術講演梗概集』（東海）2003年　pp.1295－1296

ii 朴美玉　「中高生時の居住体験が将来の居住志向に及ぼす影響について―インテリアに着目して―」宇都宮大学教育学部2007年度卒業論文

iii 2財団法人日本住総合センター「住教育の推進方策と『住教育ガイドライン』の策定に関する検討調査」2008年 p.131

iv 鈴木儀雄「子供のためのインテリア教育の可能性」『大阪芸術大学短期大学部紀要』（26号）　2002年 pp.13－31